

[平成20年度普及に移す技術]

[技術名]「越南208号」の生育特性と栽培法

[要約]「越南208号」は草丈は低いが、中後半の生育が旺盛である。植付株数 60 株/坪、基肥窒素 6~7kg/10a、穂肥窒素 2kg/10a の 2 回施用の栽培で、630kg/10a の収量が期待され、食味低下の懸念もない。

[キーワード] 水稲、奨励品種、「越南208号」、施肥

[担当] 福井農試・作物育種部・作物研究グループ

[連絡先] 0776-54-5100、電子メール toyohiko_oida@fklab.fukui.fukui.jp

[背景・ねらい]

コシヒカリと日本晴の中間熟期で、良食味なことなどから、新奨励品種候補として有望視している「越南208号」の現地普及のために、好適な栽培法を明らかにする。

[技術の内容・特徴]

1. 「越南208号」の生育は、県内の他の品種に比べて、草丈が最も低く推移し、初期生育はやや緩慢だが、葉色は濃く、日本晴に比べ有効茎歩合が高い(図1)。
2. 総乾物重は、熟期が遅い分だけ重くなり、総重に占める籾重の比率は同等なので、そのまま多収につながる(図2)。穂数がハナエチゼン並に多く、1稈当たりの稈+葉鞘重はコシヒカリをやや下回るが、その割に葉身部はイクヒカリ並に重い。
なお、根重は幼穂形成期以降イクヒカリを下回ってコシヒカリ並みとなり、T/R比は大きく推移する。
3. 多肥栽培で容易に増収するが、玄米タンパク質含有率 6.0%までならば味度値も高く維持される(図3)。
4. 基肥量は、地力中庸な水田での全層施肥で窒素 6~7kg、大きな乾土効果の見込まれる転作後などでは 2~3kg が適当である。玄米タンパク質含有率はもっぱら穂肥量に左右され、前者の目標を 6.0%までとすれば、穂肥は窒素 2kg/10a の 2 回施用が上限である(図4)。
5. 4により収量 630kg/10a が期待され、その時の収量構成要素の目安は、穂数 430 本/m²、一穂籾数 74 粒、登熟歩合 90%、千粒重 22 g である。

[技術の活用面・留意点]

1. 苗丈は短く、育苗期に低温だと葉色も淡くなりやすいので、育苗期の温度管理に注意する。
2. 晩生品種の作付けがほとんど無くなっているため、登熟期の用水の確保に留意する。またニカメイチュウの多発時には防除を徹底する。
3. 栽植株数は 60 株/坪で十分である。密植にすることで、葉色が淡く一穂の籾数が減って結果的に千粒重が増大する効果もあるが、地力が高すぎれば籾数過多になる。
4. 玄米外観品質も収量増大に伴い低下する傾向であるが、試験の範囲内ではいずれも達観で整粒率 80%を確保し、急に落ち込むような分岐点も認められなかった。

[普及計画]

普及目標：150ha

普及対象：県内生産組織および大規模農家

普及に向けた対応：成果発表会等での情報提供、栽培マニュアルの作成、実証圃での試作支援、フィールドレポート・HPへの掲載、実需者への求評に対する協力

[具体的データ]

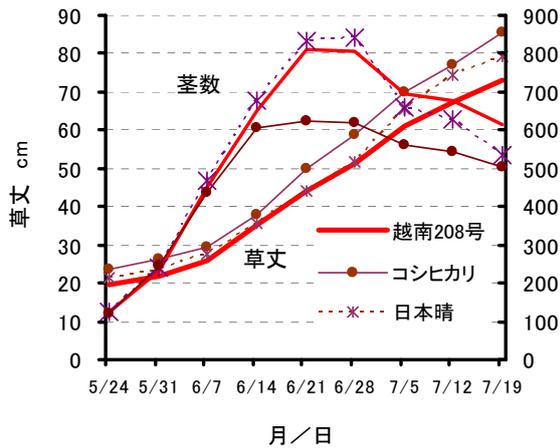


図1 越南 208 号の生育経過 (2007)

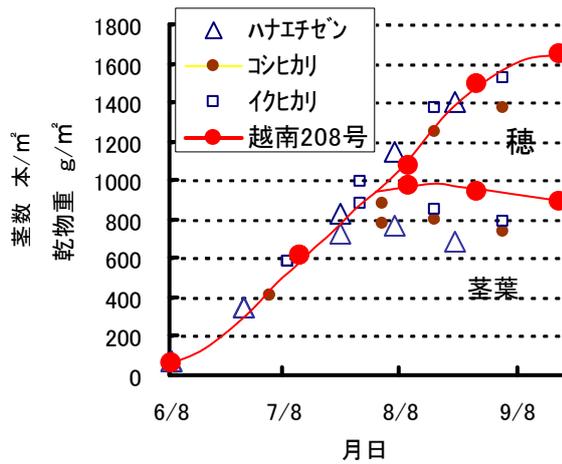


図2 乾物重の推移
出穂後は、下が茎葉重、
上が穂重を加えた全重

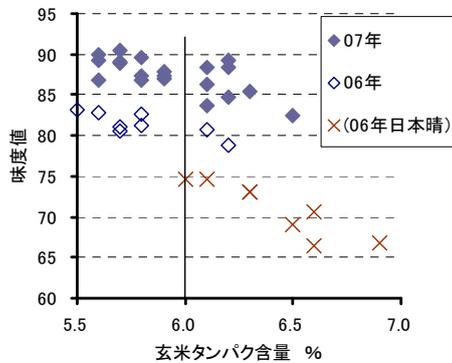


図3 玄米タンパク含量と味度との関係

玄米タンパク含量はS社食
味分析計RS2000での測定

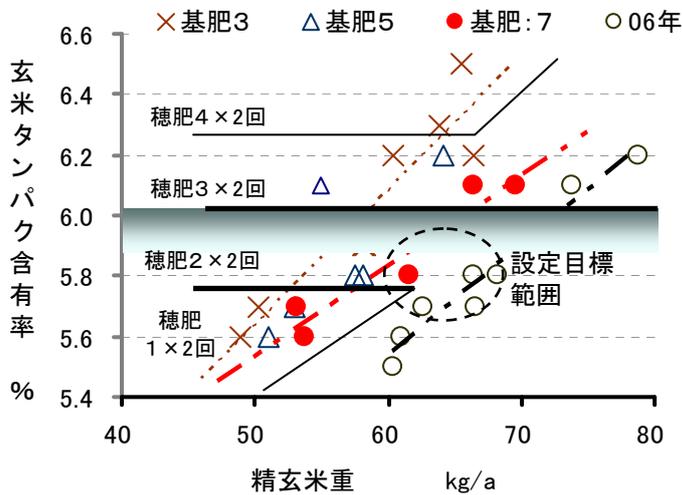


図4 施肥配分による収量と玄米タンパク (2007、一部2006年)

栽植株数 (19、24 株/m²) × 基肥
量 × 穂肥量の試験結果。ただし、
栽植密度による差は小さかったの
で区別していない。

マークは基肥量 (と年次) で区
分しており、凡例の数字が 10 a 当
たり窒素成分量を表す。06 年は転
換復帰田で、基肥窒素量は 3
kg/10a。

玄米タンパク含有率は図中の実
線のように、穂肥施用量で区切ら
れた。

[その他]

研究課題名：水稻奨励品種決定調査

研究期間：2005～2007 年度

研究担当者：笈田豊彦、佐藤陽子、田中豊実、土田政憲